二〇二一年度

国語

（B日程）

（解答はすべて解答用紙に記入しなさい）

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

自立していく上で大切なこととして、甘えの克服がある。

もっとも日本の社会においては、甘えが人間関係の基本になっているので、甘えを完全に克服するのは不可能[a]だし、そうする必要もない。良好かつ健全な人間関係を築く上においても、甘えが果たす役割は小さくない。

親や友だちに対して、「なんでわかってくれないの？」「わかってくれたっていいじゃないか」と思い、イライラすることはないだろうか。そこには[1]「当然わかってくれるだろう」「きっとわかってもらえるはず」といった期待がある。

甘え理論を提唱した精神分析学者の土居健郎[注1]は、甘えの心理的原型は乳児期に求められ、「甘えの心理は、人間存在に本来つきものの分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚しようとすることであると定義することができる。」（土居健郎『「甘え」の構造』弘文堂）という。

つまり、親子といえどもけっして一心同体ではなく、切り離された別々の個体だという厳然とした事実を受け入れがたく、一体感の幻想にすがろうとする心理が、甘えの基礎になっているというわけだ。

いわば甘えというのは、個と個が分離しているという冷たい現実を受け入れたくないという思いから心理的一体感を求めることである。

心理的に一体なのだから、「わざわざ口に出して言わなくても、［A］わかってくれるはず」といった思いが心の片隅にある。それが甘えの心理ということになる。

自己主張を軸に対人関係を結ぶ欧米人と違って、僕たち日本人は相手の期待に応えたい、相手の期待を裏切りたくないという思いを軸に対人関係を結ぶ。それと同時に、相手もこちらの期待を裏切らないはずといった期待がある。その意味では、日本社会においては甘えの心理が人と人を取り結ぶと言ってよいだろう。

だが、そうした期待が空振りに終わると、「裏切られた思い」に駆られ、落胆すると同時に、攻撃的な気持ちが湧いてくる。

土居によれば、甘えたい気持ちがそのままに受け入れられないとき、「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」「恨む」といった心理が生じ、そこに被害者意識が含まれる。

素直に甘えさせてくれないから「すねる」わけだが、すねながら甘えているとも言える。その結果として、「ふてくされる」「やけくそになる」というようなことになる。

白分が不当な扱いを受けたと曲解するとき[注2]「ひがむ」わけだが、それは自分の甘えの当てが外れたことによる。

甘えないで相手に背を向けるのが[b]「ひねくれる」だが、それは自分の甘えの期待に応えてくれなかったと感じることによる。

甘えが拒絶されたということで相手に敵意を向けるのが「恨む」である。

このように［　2　］とき、すねたりひがんだり恨んだりするわけだが、そこには被害感情がある。

お互いに依存し合い、甘えを介してつながっている日本人の人間関係では、甘えが阻止されたときに、欲求不満による攻撃性が生じる。甘えが拒絶されたことによって生じる怒り反応。それが甘え型の攻撃性である。[3]

そこには、甘えと一見正反対の恨みが生じたりするが、じつはそれらは同じ根っこから生じているのである。

「わざわざ言わなくてもきっとわかってくれる」「こっちのことを気にかけてくれているはず」と期待しているのに、そうした期待が裏切られ、甘えの欲求が阻止されたときに、欲求不満による攻撃性が生じるのである。

「なんで汲み取ってくれないんだ」「わかってくれたっていいじゃない」「わざわざ言わないとわからないなんて冷たすぎる」といった反応が、甘え型の攻撃性の発露ということになる。

こうした心理は、日本社会で自己形成してきた人ならだれもがもっているものだが、それが強すぎると、関係が深まりかけたところで欲求不満が募り、甘え型攻撃性が猛威を振るい、せっかくの関係の進展を阻害することになりかねない。[4]

わかってほしいという気持ちはだれもがもつものだし、親しい相手に対して、わかってくれるはずといった期待を抱くのも自然なことだ。しかし、相手が心の中で何を思っているか、何を感じているかなど、［　B　］わかるものではない。ゆえに、相手としては、甘え型攻撃性ですねたりふてくされたりされてもどう対処したらよいかわからず、それが度を越すとめんどうくさくなり、「わけわからない」「勝手にイライラするなよ」と攻撃的な気持ちが湧いてきて、お互いにイライラしてしまう。

「わかってほしい」「わかってくれるはず」といった期待が強いほど、そうした期待が裏切られがちな現実に傷つき、さみしさに押し潰されそうになる。

結局のところ、他の人の心の中を、相手が期待しているほどに汲み取るのは不可能なのである。ゆえに、親密な絆を築いていく

には、人間存在の個別性を念頭において、強すぎる甘えを克服することが必要となる。

（出典　板本博明『「さみしさ」の力　孤独と自立の心理学』ちくまプリマー新書による）

注1　止揚…対立する物事を一つにまとめあげて、より良い状態に引き上げること。

注2　曲解…物事や相手の言動などを素直に受け取らないで、ねじまげて解釈すること。

問一　〰〰線a「不可能」は「不＋可能」という組み立てになっています。これと同じ組み立ての三字熟語を次の語群の中から一つ選び、ひらがなを漢字に直して答えなさい。

語群　［　いちもくさん　　たすうけつ　　じかんたい　　ひじょうしき　　しちょうそん　］

問二　〰〰線b「背を向ける」と同じように、次の□に入る漢字を一字ずつ書き入れて、「背」に関する慣用句を完成させなさい。

㋐　背筋が□くなる（意味＝おそろしさや気味悪さでぞっとする）

㋑　背に□はかえられぬ（意味＝大事なことのためには、他のことを犠牲にするのはやむを得ない）

問三　□A・Bに入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　なかなか　　イ　まるで　　ウ　どうぞ　　エ　きっと　　オ　もし　　カ　ぜひ

問四　――線1「『当然わかってくれるだろう』『きっとわかってもらえるはず』といった期待」とありますが、ここにはどのような心理が働いていますか。五十字以内で説明しなさい。（句読点等記号も一字に数える。以下の問いも同じ。）

問五　□2に入る語句として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　甘えが思うように通じない

イ　甘えられることを拒否する

ウ　甘えることに負担を感じる

エ　甘えによって相手が傷つく

オ　甘えから依存へと変化する

問六　――線3「それらは同じ根っこから生じている」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　甘えと拒絶はどちらも日本人の人間関係の本質であるということ。
イ　甘えと拒絶はどちらも相手へのあこがれから生じているということ。
ウ　甘えと恨みはどちらも日本人の攻撃性を強める要因であるということ。
エ　甘えと恨みはどちらも相手への期待から生まれているということ。
オ　甘えと恨みはどちらも相手への思いやりに基づいているということ。

問七　――線4「せっかくの関係の進展を阻害することになりかねない」とありますが、親密な仲を築くためには何が必要ですか。本文中から二十九字で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問八　本文の内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　日本人がすねたりひがんだりすることが多いのは、相手の期待を裏切りたくないと強く思うからである。
イ　自己主張が苦手な日本人は、人間関係において相手を受け入れることで自分が傷つかないようにしてきた。
ウ　欧米人は自分を理解してもらえないことに苦しみながらも、他人を思いやる人間関係を作りあげてきた。
エ　甘えたい気持ちが相手に受け入れられないときには相手を攻撃するのではなく、ほめてあげるのが一番だ。
オ　甘え型攻撃性は、自分の期待に応えて欲しいという甘えが拒絶されたことで生じる怒りの反応である。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

五年生が計二名に増えてから、ひと月くらい経った真冬の朝。

教室に現れた野見山くんは、なんだかそわそわして様子がおかしかった。朝の会の最中も、授業が始まってからもうわの空で、窓の外を見ている回数が明らかに多い。

野見山くんが勉強に集中せずにいるなんてことそれまで一度もなかったからか、朝比奈先生も四年生たちも、その異変を察知できていなかった。

おかしいのに、どうしてみんな気づかないんだろう。……というより、どうしてわたしは気づいたんだろう？

だからといってわたしひとりが騒いでも仕方ないし、今までよそよそしく過ごしてきたのに急に話しかけられもしないし、だいいち助けを求められたわけじゃない。だから隣の席をときおり視界には入れながら、そっとしておくことにした。

違和感がずっと残ったまま、それでも一時間ずつ授業は終わっていって、放課後。

当番だった廊下の掃除を済ませ、朝比奈先生にさようならを言ったわたしは、家に向かって歩きだした。

きつい坂を登り、車のほとんど通らない道路をずんずん進み、それが二またに分かれるひらけた場所まで来たときだった。道端に通学かばんをしょった小学生がぽうっと立っているのが見えた。間違いなく野見山くんだ。わたしよりかなり先に学校を出ていったはずなのに。

顔を向けている先にあるのは、だだっ広い田んぼだった。前の日に［A］雪が降っていたせいで、山にぶつかる際までいちめん真っ白に覆われている。

わたしは足を止め、なんなんだろうと思いながら同級生の姿を眺めた。あたりの空気はきいんと凍っていて静かだった。いつもならそのまま黙って通り過ぎたけど、なぜかその日は、そうしたくなかった。

すると野見山くんが、右足を田んぼへ向かって踏み出した。

さくっ。

足もとの雪が崩れる軽い音が聞こえた気がした。

考える暇もなく、わたしは駆けだした。息をするのも忘れて。

……間に合って！

両手を思いっきり前へ伸ばす。さらに二、三歩進んだ青い長靴が、白い地面にすっぽり埋もれてしまうすんでのところで、わたしの指が野見山くんの右腕にかかった。

爪を立てて力任せにぐいっと引っぱりあげる。

間に合った！

野見山くんが腰をひねるようにして振り向いた。あっけにとられ、なおかつひるんだようなその口がわたしをとらえる。きっと何が起きたかわからなかったんだと思う。

はあっとお腹から空気を吐き出し、わたしはようやく呼吸を取り戻した。

一拍遅れて、身体の中に怒りに似た感情がふつりふつりと湧きあがる。目の前の華奢な身体をがくがく揺さぶってやりたくなった。

「この下！　用水路！」

「……あっ。」

わたしのことばを理解したらしい野見山くんは、慌てて体勢を立て直すと、よろけながら後ずさった。雪が積もる前この場所にどういうものがあったか、自分の今いる位置がどこなのか、やっとわかってきたみたいだった。

冬だから稲を育てるための水は流れていないけど、だからこそもし雪がやわらかかったら、コンクリートの溝の底までずずっと滑り落ちてしまう。子どもが自力で這いあがるのは難しいし、助けを呼んでもひとが通るとはかぎらない。

まだ暴れ回っている心臓を落ち着けようとしながら、わたしは野見山くんが着ているベンチコートをしっかりつかみ直した。離しちゃいけないと何かが強く訴えかけていた。

「野見山くん、きょう、ずっと変……。」

勢いで言ってしまってから、あっと思う。これじゃ一日じゅう気になって観察してましたって白状したのとおんなじだ。

やばい。変なのはわたしのほうだよ。

2 さっきまでとは違う理由で焦りながら、おそるおそる相手の表情をうかがう。

すると野見山くんは驚いた目をして、口を半開きにして固まっていた。
それはすごく、子どもっぽい反応だった。
もちろん野見山行人は□真□銘の小学五年生だったんだけど、それまでの一か月間、この男の子は生活態度にも学校の成績にも非の打ちどころがなかったから、同い年って気があまりしていなかったのかもしれない。
だからこんな、急に驚かされて何も言えなくなっちゃうような、まぬけな顔もするんだと知ってわたしのほうがびっくりしてしまった。
「……登校してるとき、手袋をなくして。」
ぼそぼそと、自信なさげにその唇が動く。
わたしは野見山くんの両手をぱっと見た。そう言われてみると、左手には黒い手袋をはめているのに、右手は肌が丸見えだ。指先がかじかんで赤くなっている。
「このへんに落としたってこと？」
「落としたっていうか、投げた。」
「『投げた』？」
「雪を丸めて、田んぼに向かって何回か投げてるうちに、すぽっと脱げちゃって……。」
はっきりとは言い切らずに、野見山くんは人さし指で正面をさす。
そこに広がる田んぼの表面をわたしはじっくり眺めてみた。ぶ厚い雪のじゅうたんのところどころに、動物の足跡にしては大きすぎるへっこんだ部分があった。どうやらそれが、雪玉を投げこんだっていう跡らしい。
……っていうか、雪投げて手袋なくすって！
「ぶふっ。」
我慢できずに噴き出すと、優等生の頬と耳がみるみる真っ赤に染まった。
「ごめん、ごめん。」
わたしの謝り方はどう考えても雑だった。だけど、こみあげてくる感情をすぐにしずめるなんてできなかったんだ。

自分と同学年の山村留学生が現れてからというもの、ずっと張りつめていた身の回りの空気がふいにゆるみだして、おかしくて、わたしはけらけら笑い続けた。

濃い茶色の睫毛を伏せ、野見山くんは気まずそうに立ち尽くしていた。思いっきりばかにされたのでつんと拗ねているようにも見えた。その素直なリアクションが妙にうれしかった。

「の、野見山くんさあー　雪投げるの、そんなに好きなの？」

「だって……投げたくならない？　こんなにたくさん積もってたら。」

「そうかなあ。毎年これくらいは必ず降るよ。」

「僕はこんな景色、今年はじめて見たんだ。千葉じゃめったに積もらないから。降っても水っぽくてべしゃべしゃだったりして、うまく丸められないし。」

「丸められない雪って、それほんとに雪なの？」

尋ねると、野見山くんはきょとんとした。

そしてあらためて周囲を見渡して、ふふふ、とくぐもった声を洩らしたと思ったら、堪えきれなくなったようにくしゃっと笑った。

「そうだね。こっちがほんとの雪だ。」

それはわたしの発言にウケたわけじゃなく、はしゃいで手袋を投げてしまった今朝から、いやもしかしたらもっとずっと前から、野見山くんの中で温められていたらしいおかしさが、ぽこんと表に飛び出てきたような笑顔だった。

ひと月見てきた中でいちばん、［　B　］としてる。

だからわたしも、思いっきり笑った。

お互いの口から真っ白い息がほわっと立ち昇って、布地に隠されていない頬っぺたは冷えきって感覚がなかったけど、ただ胸のあたりだけがじんわり熱かった。

「ねえ、手袋は春になったらきっと出てくるから、今はあきらめなよ。これ貸してあげる。」

つけていた赤い手袋をわたしが外して差し出すと、野見山くんはぎょっとして、首をぶんぶん横に振った。

「わたしは平気。ほかにも持ってるから。」

遠慮しないで、と押しつける。

だけど、この反応って、赤い色が好きじゃないって意味なのかも。迷惑だったかなあと後悔し始めたころ、野兄山くんはやけに真剣な面持ちで手袋をさっと受け取り、片方だけ着けていた黒いのを外してポケットにしまうと、わたしの赤いのをきゅっきゅっと両手にはめた。サイズはぴったりだった。

「桑島さんは、ずっと……僕のこと、避けてたよね。」

感触をたしかめるように十本の指を動かしながら、そうつぶやいた。責める調子ではなく、あくまで確認だというように。

ああ、とっくにバレてたんだ。

面と向かって言われてしまっても意外だとは思わなくて、そりゃそうだよねって、納得する気持ちのほうが大きかった。

「それもごめん。でも、嫌いってわけじゃないよ。よそから来た子が苦手なだけ。」

嘘なんかついてもしょうがないと感じたから、素直に話した。むしろわたしはこの機会を待っていたのかもしれなかった。

（出典　眞島めいり『みつきの雪』講談社による）

問一　〰〰線a「うわの空」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　打ち込んでいるようす　　イ　あせっているようす　　ウ　判断を迷っているようす

エ　おびえているようす　　オ　注意が向かないようす

問二　〰〰線bは「うそいつわりのない本物であること」という意味を表す四字熟語です。□に共通して入る漢字一字を答えなさい。

問三　□A・Bに入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　A＝ゆっくり　B＝おどおど

イ　A＝たっぷり　B＝いきいき

ウ　A＝こっそり　B＝さばさば

エ　A＝さっぱり　B＝わくわく

オ　A＝ずっしり　B＝はらはら

問四　――線1「考える暇もなく、わたしは駆けだした」とありますが、何のためですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　野見山くんが勉強に集中できるように、同級生として相談に乗るため。
イ　朝から様子がおかしい野見山くんをつかまえて、理由を問いただすため。
ウ　野見山くんと二人で話せる機会を利用して、これまでの誤解をとくため。
エ　野見山くんが雪のせいで用水路に気づかず、落ちてしまうのを防ぐため。
オ　野見山くんに声をかけて、雪遊びは危険だということを知らせるため。

問五　――線2「さっきまでとは違う理由」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　野見山くんの様子が気になって一日中見ていたことを知られたと思ったから。
イ　野見山くんに以前から好意を寄せていたことに気づかれたと思ったから。
ウ　野見山くんの腕を乱暴に引っぱってしまったことを申し訳なく思ったから。
エ　野見山くんに用水路のおそろしさを伝えなければならないと思ったから。
オ　野見山くんが大切な手袋をなくしてしまったのはかわいそうだと思ったから。

問六　――線3「わたしのほうがびっくりしてしまった」とありますが、なぜですか。四十五字以内で説明しなさい。（句読点等記号も一字に数える。以下の問いも同じ。）

問七　――線4「我慢できずに噴き出す」とありますが、何がおかしかったのですか。次の文の空欄にあてはまる言葉を本文中から十五字で抜き出しなさい。

野見山くんが［（十五字）］こと。

問八　――線5「そりゃそうだよね」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　わたしが過去に受けた心の傷を野見山くんに理解してもらえなくても無理はないということ。
イ　わたしが貸した赤い手袋を野見山くんが気に入らないのは仕方のないことだということ。
ウ　わたしが野見山くんを避けていたことに野見山くんが気づいているのは当然だということ。
エ　わたしが野見山くんを避けていることで野見山くんが深く傷ついていたのだということ。
オ　わたしが思わせぶりな態度を取ることで野見山くんに誤解を与えてしまっていたということ。

三　次の各問いに答えなさい。

問一　次の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

① 街がサカえる。
② 外でゲンキに遊ぶ。
③ キヨらかな水が流れている。
④ 池のガイシュウを歩く。
⑤ イロガミでかざりを作る。

問二　次の――線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

① 快晴にめぐまれる。
② 電子辞書を買ってもらう。
③ 食品の変質を防ぐ。
④ 運動場には鉄棒がある。
⑤ 母の機嫌を損ねる。

二〇二一年度　国　語（B日程）　解答用紙

一

問一

問二　㋐　㋑

問三　A　B

問四

問五

問六

問七

二

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

三

問一　①　②　③　④　⑤

問二　①　②　③　④　⑤

問六

問七

問八

名前は書かないように

受験番号				